



# BookTalk

編集・発行 海南高校図書部  
第14号 2012. 6. 12

幼く、まだ字が読めない頃、母親が寝る前に布団の中で、「桃太郎」「金太郎」「猿蟹合戦」「一寸法師」「かちかち山」などの昔話をしてくれたのを今でも覚えている。眠りにつく前の楽しいひと時であった。しかし、字を読めるようになってから母親に本を買ってもらった記憶はほとんどない。



私は1952年(昭和27年)、日高川の中流域にある旧美山村(現在の日高川町)で生まれた。幼いころ、日高川へ川遊びに行けば第二次世界大戦中に米軍が投下した焼夷弾(日本の家屋を燃やす目的で米軍が投下した爆弾)が赤くさびた状態でたくさん砂利に埋もれていた。火薬が入っていないので爆発の危険はなかったが、戦争の傷跡を身近に感じる時代であった。保育所や幼稚園が近くになく、残念ながら小学校入学まで本とはほとんど縁がなかった。

小学校で毎年真新しい教科書を手にした時のうれしさは格別であった。家に帰って、さっそく教科書に載っている物語を読み始めたが知らない漢字が多く、その都度、母に聞いたので母は大変だっただろう。田舎の小学校には小さな図書館があり、みんなの憩いの場であった。蔵書数は少なかったが、昼休みになればクラスメイトと図書館に行き、「ロビンソン漂流記」「走れメロス」「ヘンデルとグレーテル」「長靴をはいた猫」「みにくいアヒルの子」などの児童文学作品、「エジソン」「野口英世」「シュバイツァー」などの伝記物語を読んだ。「自分も大きくなったら人のために役に立つことをしたい」と思ったものだった。そして、もう一つの楽しみは、クラスメイトが学校に持ってくる漫画雑誌だった。それは「少年画報」という漫画月刊誌で、「猿飛佐助」「赤胴鈴之助」がヒーローとして登場し、悪を退治した。常にクラスメイトの何人かがその友達の周囲に集まり、一緒になって漫画を読んだ。私もその一人だった。その漫画を読んでいるとき、私もその中のヒーローになりきることができ、実に心地よい瞬間でもあった。



私は旅が好きだ。本ならタイムマシンがなくても過去にタイムスリップすることができる。その中で、幕末から明治にいたる人々の暮らしは実に興味深い。

幕末の1853年、黒船来航を中学校の授業で習ったとき、一つの疑問がわいた。それは「当時の日本人はどのような手段でペリーと会話したのだろうか」というものであった。大学生の時、たまたま「中浜万次郎の生涯」中浜明(著)を書店で見つけ、中浜万次郎が通訳をしたことを知った。黒船が来航する以前の1841年、土佐の漁師であった中浜万次郎が、同僚二人とカツオ漁に出て遭難し、アメリカの捕鯨船に救助された。捕鯨船の船長は万次郎をアメリカ本土に連れて行き、名前をジョン万次郎と呼び、自宅に住ませ、学校にも通わせた。1851年、ジョン万次郎は鎖国中の日本に帰国した。徳川幕府はペリーが浦賀に来航したとき、万次郎を通訳として土佐から江戸に呼び寄せた。ペリーの浦賀来航、それに続く日米和親条約の締結では万次郎が通訳として活躍した。著書には万次郎が使った英語指導書の一部が記載されているが、英



語発音に工夫が凝らされている。例えば、waterは「わら」、Sundayは「さんれい」といった具合である。

1999年発行の「カナ表記で通じる英語の発音」島岡丘(著)では、カタカナを使って英語の音に近い発音ができるように工夫されている。例えば、brightは「ブアイト」、tradeは「チュエイド」、milkは「メウク」といった具合に、現在の著名な英語指導者の中にも万次郎のように日本語を工夫しての英語発音指導を推奨する英語学者がいる。「福翁自伝」福沢諭吉(著)には諭吉の性格や幕末の動乱の時代を生き抜いた諭吉の生涯がつづられている。1860年(万延元年)、咸臨丸は日米通商条約批准書交換のためアメリカに向かうが、咸臨丸には福沢諭吉の他、艦長の勝海舟、通訳の万次郎が乗船していた。諭吉は懇願して咸臨丸に乗船を許されたが、咸臨丸が品川を出港して浦賀に立ち寄った際に宿泊した宿にあった茶碗を咸臨丸に持ち帰り、この茶碗を航海中の咸臨丸での食事に使ったこと、アメリカのサンフランシスコに滞在中に写真店の娘さんと一緒に写真を撮り、帰りの船の中で仲間に自慢したことなど、当時のエピソードがつづられている。諭吉は後年ヨーロッパ各国も訪問した。ロシアでは留まることを勧められ、フランスでは生麦事件の影響で冷遇されたことが記されている。「福翁自伝」は幕末の日本を知るうえで興味深い一冊だ。「新編日本の面影」小泉八雲(ラフカディオ・ハーン)(著)池田雅之(翻訳)は明治時代ののどかな日本の様子を垣間見ることができ興味深い。八雲は日本の第一印象を人も物もすべてが小さく、神秘的な国だと書いている。八雲は西洋から入ってきたもの(背の高い西洋人、英語文字の看板)は目障りなものと考え、日本文化を高く評価している。人々は礼儀正しく、穏やかな表情をしている。ただし、日本人の「微笑」は外国人とのトラブルを引き起こすこともあったようだ。私が教師になって初めて読んだのが小説「破戒」島崎藤村(著)であった。「主人公の瀬川丑松の素性が最後まで周囲に知られなければいいが」と思い、ドキドキしながら読んだものだ。部落差別が厳しかったとされた明治時代と今の時代を比べて、科学技術は別にして人間社会は本当に進歩したのだろうか。そうでなければ困るが。私は今年で60歳になる。来年3月で定年退職だ。最近では退職後をどう生きるかを考えることが多くなった。私のパソコンの前にある数冊の本が横たわっている。「おひとりさまの老後」上野千鶴子(著)、「男おひとりさま道」上野千鶴子(著)、「55歳からの一番楽しい人生の見つけ方」川北義則(著)、「日本ミツバチ—在来種養蜂の実際—」藤原誠田(著)、「森づくりテキストブック」中川重年(著)、「定年後もう一度大学へ—還暦の〇大生『心理学』を学ぶ」渡辺三千男(著)、「おじいちゃんは〇大生」岡本寿郎(著)だ。どれも定年後の私の生き方にヒントを与えてくれるが、まだ私の結論は出していない。(英語科 佐々木敏光)

佐々木先生  
(英語科)  
人生訓

## 本は人生の羅針盤

語発音に工夫が凝らされている。例えば、waterは「わら」、Sundayは「さんれい」といった具合である。

1999年発行の「カナ表記で通じる英語の発音」島岡丘(著)では、カタカナを使って英語の音に近い発音ができるように工夫されている。例えば、brightは「ブアイト」、tradeは「チュエイド」、milkは「メウク」といった具合に、現在の著名な英語指導者の中にも万次郎のように日本語を工夫しての英語発音指導を推奨する英語学者がいる。

「福翁自伝」福沢諭吉(著)には諭吉の性格や幕末の動乱の時代を生き抜いた諭吉の生涯がつづられている。1860年(万延元年)、咸臨丸は日米通商条約批准書交換のためアメリカに向かうが、咸臨丸には福沢諭吉の他、艦長の勝海舟、通訳の万次郎が乗船していた。諭吉は懇願して咸臨丸に乗船を許されたが、咸臨丸が品川を出港して浦賀に立ち寄った際に宿泊した宿にあ



った茶碗を咸臨丸に持ち帰り、この茶碗を航海中の咸臨丸での食事に使ったこと、アメリカのサンフランシスコに滞在中に写真店の娘さんと一緒に写真を撮り、帰りの船の中で仲間に自慢したことなど、当時のエピソードがつづられている。諭吉は後年ヨーロッパ各国も訪問した。ロシアでは留まることを勧められ、フランスでは生麦事件の影響で冷遇されたことが記されている。「福翁自伝」は幕末の日本を知るうえで興味深い一冊だ。

「新編日本の面影」小泉八雲(ラフカディオ・ハーン)(著)池田雅之(翻訳)は明治時代ののどかな日本の様子を垣間見ることができ興味深い。八雲は日本の第一印象を人も物もすべてが小さく、神秘的な国だと書いている。八雲は西洋から入ってきたもの(背の高い西洋人、英語文字の看板)は目障りなものと考え、日本文化を高く評価している。人々は礼儀正しく、穏やかな表情をしている。ただし、日本人の「微笑」は外国人とのトラブルを引き起こすこともあったようだ。

私が教師になって初めて読んだのが小説「破戒」島崎藤村(著)であった。「主人公の瀬川丑松の素性が最後まで周囲に知られなければいいが」と思い、ドキドキしながら読んだものだ。部落差別が厳しかったとされた明治時代と今の時代を比べて、科学技術は別にして人間社会は本当に進歩したのだろうか。そうでなければ困るが。私は今年で60歳になる。来年3月で定年退職だ。最近では退職後をどう生きるかを考えることが多くなった。私のパソコンの前にある数冊の本が横たわっている。「おひとりさまの老後」上野千鶴子(著)、「男おひとりさま道」上野千鶴子(著)、「55歳からの一番楽しい人生の見つけ方」川北義則(著)、「日本ミツバチ—在来種養蜂の実際—」藤原誠田(著)、「森づくりテキストブック」中川重年(著)、「定年後もう一度大学へ—還暦の〇大生『心理学』を学ぶ」渡辺三千男(著)、「おじいちゃんは〇大生」岡本寿郎(著)だ。どれも定年後の私の生き方にヒントを与えてくれるが、まだ私の結論は出していない。(英語科 佐々木敏光)



種養蜂の実際—」藤原誠田(著)、「森づくりテキストブック」中川重年(著)、「定年後もう一度大学へ—還暦の〇大生『心理学』を学ぶ」渡辺三千男(著)、「おじいちゃんは〇大生」岡本寿郎(著)だ。どれも定年後の私の生き方にヒントを与えてくれるが、まだ私の結論は出していない。(英語科 佐々木敏光)

